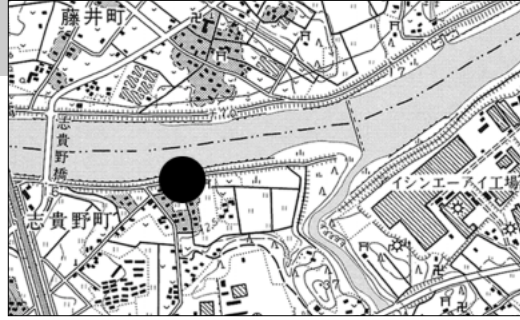


こしんでん 古新田遺跡

所在地 西尾市志貴野町
 調査理由 矢作川河川改修に伴う事前調査
 調査期間 平成12年11月～平成13年3月
 調査面積 4,100 m²
 担当者 花井 伸・小嶋廣也・武井繁樹



調査地点 (1/2.5万「西尾」)

調査の経過 調査は、矢作川河川改修予定地内における事前調査であり、国土交通省より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成12年11月から平成13年3月にかけて実施した。調査面積は、4,100 m²である。

立地と環境 古新田遺跡は、愛知県の中央を流れる矢作川流域の岡崎平野南部にあって、南西部が三河湾に接する西尾市志貴野町に所在する。本遺跡は矢作川と矢作古川との分岐点近くの矢作川左岸に位置するが、江戸時代初期にこの川が開削される以前は、対岸の安城市域から南に延びる碧海台地の東端にあって、大郷山や小島山の分離丘陵や台地から旧矢作川に向かっての開析谷に面していた。

本遺跡の周辺には多くの遺跡が立地しており、愛知県埋蔵文化財センターにおいても矢作川対岸の木戸城跡（古代の集落、中世城館）、西には志貴野遺跡（古代の集落）、南の沖積地に岡島遺跡（弥生時代の集落）などの調査を行っている。なお、本遺跡に隣接する新堤防建設に伴う事前調査として平成6年度に西尾市教育委員会が調査を行い、古墳時代後期と中世の集落跡を確認している。

調査の概要 調査区は東西約160 m、南北約30 mの長方形を呈し、東西方向では西から東に向かって緩やかに傾斜し、標高約12 mから約9 mまでで推移する。調査区東端では、台地が西から東に向かって落ち込んでいた。南北方向はほぼ水平であるが、南側は新堤防建設のため削平され、北側は矢作川に向かって台地の落ち込みが見られた。旧堤防盛土を含む表土を重機で除去し、さらに中世包含層直上まで掘り下げ遺構の検出を行った。調査の結果、飛鳥時代から奈良時代と平安時代から室町時代の遺構、遺物を確認することができた。

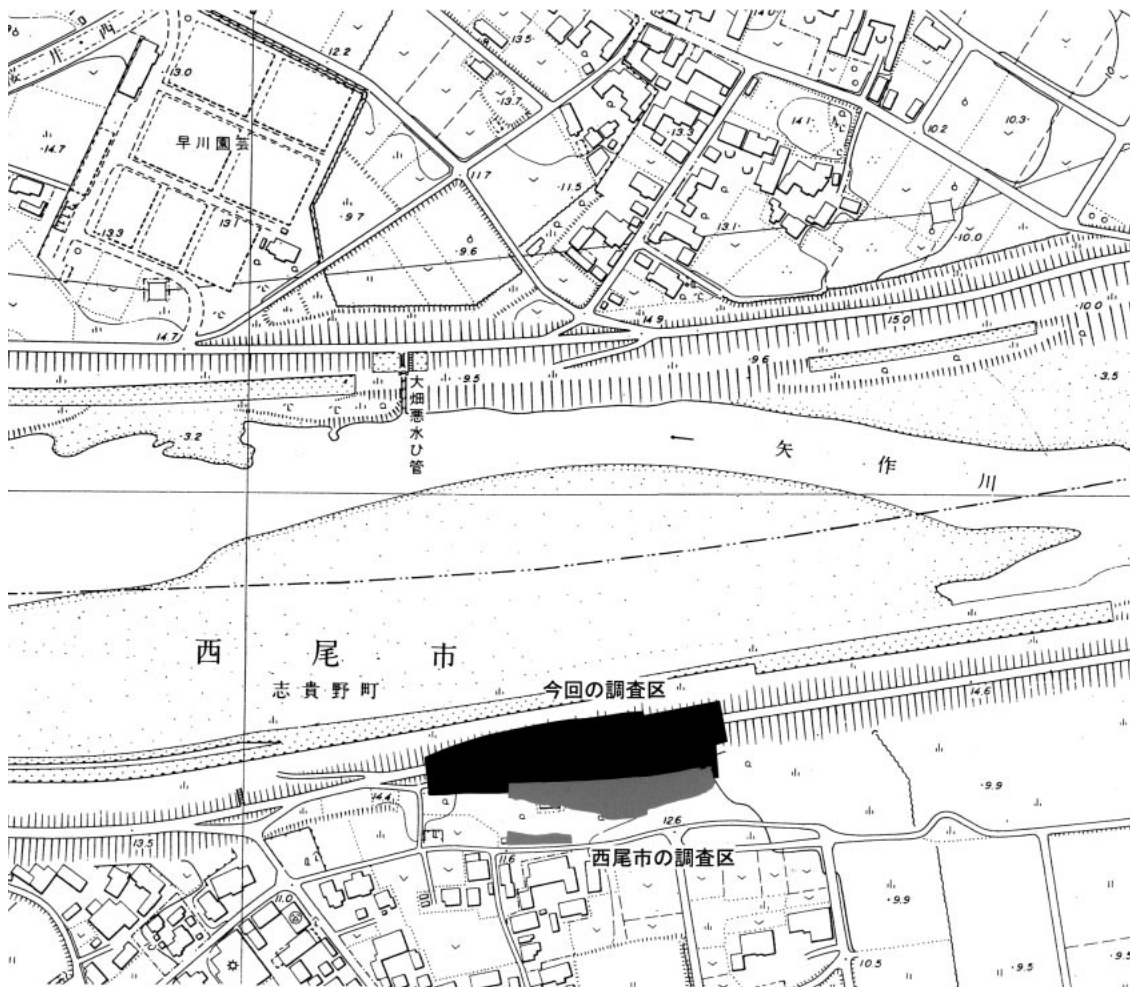
飛鳥時代から奈良時代の遺構としては、竪穴住居、土坑、溝、多数のピットを検出した。竪穴住居は調査区全体で20棟以上が確認され、一辺が4～6 mと大型のものが多く、ほとんどが隅丸方形を呈していた。4本の支柱穴や周溝、カマドを持つものもあるが、残存状態が悪く焼土面のみが残るものがほとんどである。出土遺物については、土師器の甕・甑・土錘、須恵器の蓋杯・高杯などがみられる。また、これ以外に、軒丸瓦や平瓦・丸瓦などの古代瓦と思われる布目瓦や瓦塔が出土した。

平安時代から室町時代の遺構としては、掘立柱建物、土坑墓、柵列、溝、多数の土坑やピットを検出した。掘立柱建物については、柱穴からの遺物が少ないため時代の判定が困難であるが、遺構の切り合い関係から鎌倉時代から室町時代と思われる溝と軸線が異なる建物と一致する建物に分けられる。このことから、溝と方向が同じ掘立柱建物は

鎌倉時代以降、方向が異なる建物は柱穴を破壊して溝が掘削されていることから平安時代の遺構と考える。これらの遺構はこの地方で同時期に出現した方格地割屋敷の在り方に則しており、本遺跡周辺の八ツ面山北部遺跡や室遺跡、平成6年度の西尾市教育委員会の調査でも確認されている。また、鎌倉時代と思われる井戸や地山面が被熱している土坑も確認した。遺物については、灰釉系陶器の椀・皿や鍋などの土器、中国産の青磁の破片などが出土した。

ま と め 今回の調査区は平成6年の西尾市教育委員会の調査区と隣接しており、検出された遺構の規模や出土遺物の時期から、同一遺跡の可能性が高い。双方の遺跡の調査結果や周辺の遺跡の調査結果から、周辺地域の古代集落の出現、変容、解体から中世集落の出現を考察するうえで重要な成果といえる。なお、古新田遺跡の南側には東西125m、南北130mの範囲に古代瓦の散布地が広がり志貴野廃寺の推定地とされている。今回の調査においても布目瓦や瓦塔が出土しておりその志貴野廃寺との関係が想定される。また、調査区東壁において人為的に積み上げられた堤防状の土層が確認されている。これが1605年に開削された矢作新川の堤防の一部であると考えている。

(花井 伸・小嶋廣也・武井繁樹)



調査区位置図 (1 : 5,000)



空撮写真



S B 08 (南西から)



S B 03 遺物出土状態 (北から)



S B 13 カマド断ち割り状態 (南東から)



古代瓦出土状態 (北西から)



掘立柱建物 (南東から)



S K 2965 (南から)



S K 835 (西から)



東壁セクション (北西から)